

小田原教育

第102号

平成17年7月15日

アラレタマキビの知恵



海水の届かない高所に生活するアラレタマキビは夏の炎暑時に、貝殻のへりの部分だけで岩に付着する。

こうすることで高温の岩からなるべく体を離し、体温を維持している

タマキビ類



上段 3個 タマキビ
下段右 3個 アラレタマキビ
下段左 2個 イボタマキビ
(「小田原の自然」より)

目次

巻頭言

「時代の変化に対応して学校教育に求められること」

小田原市教育研究所長 2

1 小さなころみ

① 「二宮金次郎物語の活用」

二宮尊徳読み物資料の作成に関する研究員 3

② 「小田原の子どもたちの実態を知る」

学校生活実態調査研究員 4

③ 「使いこなせる評価規準を目指して」

評価・評定に関する研究員 5

2 ある教室から

「分かち合い、伝え合おうとする心を育む」

学校教育課指導主事 6

3 教育相談指導学級から

「本町教室」から「しろやま教室」へ

教育相談指導学級主任 7

4 研究所だより

教育研究所指導主事 8



時代の変化に対応して学校教育に求められること

小田原市教育研究所 所長

最近の電車内の様子は、読書で過ごす人よりも携帯メールの打ち込みに集中する若者が多くなったようです。騒々しかった携帯電話のマナーも、会話の無いメール活用のためか静かになった気がします。何年か後の情報教育はパソコンよりもモバイル機器が中心になるだろうともいわれています。現在でも子ども会等の連絡には電話連絡網を利用するより、携帯メールによる一斉送信で行なわれたりしているようです。保護者と同様に子どもたちも、遊ぶ約束や宿題の相談などを携帯メールで行なうことが多いようです。小中学生の携帯電話を所有する割合は年毎に上昇し、高学年の小学生や中学生の大多数が所有する時代は間近です。その様な中では子どもがネットの深みにはまってしまう心配もあります。情報を正しく扱う能力は学校だけで培えるものではありませんし、当然守らなくてはならないルールは家庭・学校が協力して正しく教えることが情報教育では必要であると考えます。

教育研究所では、研究調査、研修、教育相談等に関する事業を通して、本市教育の充実、振興に寄与することを目指して運営しております。その中の一つが教育情報の収集と提供です。その一環として共同研究事業で、小田原の小中学校のホームページ「おだわらキッズシティ」の充実と学校における情報教育の活性化につながるコンテンツ（新しいホームページ）作りとしてインターネット利用に関する研究を行ってきました。これまでの情報に関する研究は、小学校では「教育におけるコンピュータ利用に関する研究」を平成9年から始めて15年まで

の7年間行ないました。さらに「教育におけるコンピュータ利用に関する研究」として、中学校では平成9年からホームページ作りを始め、その後小学校にも広げ、最新情報を更新するという課題もありますが、現在では全市小中学校のホームページが公開されています。平成17年からは新たに「教育ネットワーク活用に関する研究」を行なっています。情報の必要な市民がインターネットから得るというこれまでのシステムから、行政や学校と保護者の双方向で防災や安全などの緊急情報を共有する教育ネットワークを目指しています。個人情報の保護を最優先に、効果的なシステム作りの研究を進めたいと思います。

日本PTAのアンケートで保護者の4分の3が「学力低下を心配している」、文部科学省の学力テストでは「全体に成果が上がりつつある」等の調査結果があるように、学習意欲や学力が大きな関心を持たれています。さらに、新聞の見出し記事に、保護者の「無理難題」とあり、私立中学校受験のために「一カ月休ませてほしい」、給食費の徴収督促に対して「そんなにお金のことを言うなら、子どもをもう学校に行かせない」等々の内容がありました。「このようにしてほしい」という保護者の希望と「なぜ、そこまで」と考える教師とのずれが摩擦の原因になっているようです。極端な事例かもしれませんが、保護者も教師も「子どもたちのために」という願いは共通しています。時代の変化と共に教育に求められることも変わってきますが、お互いの信頼関係を築きつつ協力して行きたいと思っています。



小さなころみ

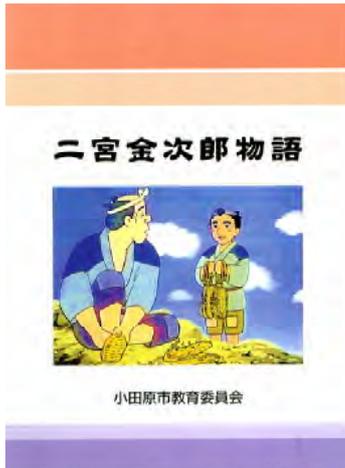
①

『二宮金次郎物語』の活用

二宮尊徳読み物資料作成に関する研究員

皆さんは「二宮金次郎物語」をお読みになっていただけましたか。平成17年は郷土の偉人二宮尊徳が亡くなってちょうど150年目に当たります。昨年度小学生にぜひ、二宮尊徳について学んでいただきたいと小学生のための読み物資料として「二宮金次郎物語」を研究所の所員の方と小田原市内の学校の研究員4名で作成いたしました。今年度はこの読み物資料をどのように活用していったらいいかを研究し始めているところです。

ところで、皆さんは、尊徳仕法の三つの実践力、「勤労」、「分度」、「推譲」という言葉をお聞きになったことがあるかと思えます。私自身もその言葉を知っているつもりでしたが、読み物資料「二宮金次郎物語」その意味の深さを知り、考えさせられました。皆さんも一緒に考えてみませんか。



尊徳の教えを説くと、

勤 労

勤労とは働くことであるが、尊徳は、何かを手に入れるために働くのは本当の意味での勤労ではないとしている。自分の徳を生かして働くことが大切であり、そのことが自分の向上につながる」と説いている。

分 度

人にはそれぞれの置かれた状況があり、立場をふまえそれにふさわしい生活を送ることが大切である。

推 譲

尊徳は譲ることを大切に考え、人のため、世のために譲ることが大切であると説いた。人は譲り合うことで初めて人間らしく生きることができる。席を譲ること、道を譲ることも推譲であり、力を譲ること（奉仕活動）も推譲である。

この三つの力が結び合うことが大切であり、この三つには「至誠」といって真心がともなうことである。

よく考えてみると、私たちの生活に通じることはありませんか。そして、子供たちにも、尊徳の教え、生き方は何かを示唆してくれているようにも感じます。私たち4名の研究員は、学校生活の中で、そして日々の学習の中で、郷土の偉人である二宮尊徳について少しでも興味関心を持っていただき、その考えに触れることができるように研究を進めています。

この冊子『二宮金次郎物語』は小学4年生の人数に合わせて配布されていますが、他の学年でも朝の読書時間や図書室等でまずは読んでいただき、ぜひ、活用していただければと考えています。

千代小学校教諭

とても明るくいつも元気ハツラツ。
子どもといることに喜びを感じながら
教務の仕事にも精を出す先生。



②

「小田原の子どもの実態を知る」

～学校生活実態調査を通して～

学校生活実態調査研究員

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

昨年度からスタートした、この「学校生活実態調査」の研究の目的は、最近の子どもたちの学校生活の様子について、教師から見た子どもの姿と、保護者から見た子どもの姿とを比べ、その違いを探ってみると言う点にある。教師、保護者の両者が見た子どもたちの姿で、一致していることは何か、また、ズレがあることは何かについて、分析するものである。

この結果を、昨年3月に、教育研究所から発行された「児童・生徒の生活と意識に関する実態調査」の内容と照らし合わせてみることも興味深い。

(2) 研究の内容

本研究では、今年3月に、小田原市立小・中学校の保護者ならびに教職員を対象にすでにアンケートをとり、回収・集計を行った。

現在は、このアンケートの結果を分析し、まとめている。

ここで、調査結果の一部を紹介する。

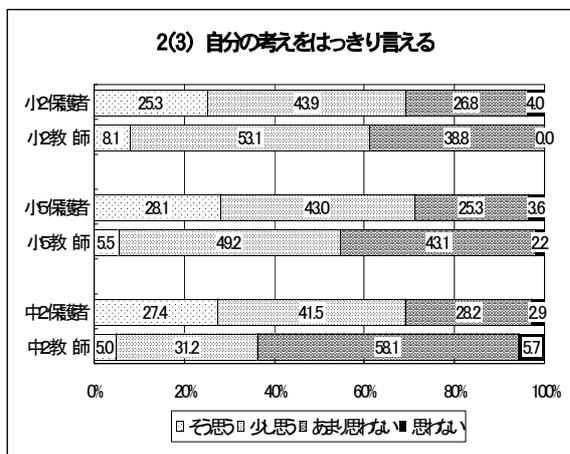
＜この結果からわかること＞

一点目は、保護者の見方である。保護者は、子どもの学年に関係なく、自分の子が、学校で、はっきり自分の考えを言っていると思っていることである。家庭で、ある程度自己主張をしている子どもの姿からそう考えたのであろう。

二点は、教師の見方である。教師は、集団の中での子どもの様子を見て、学年が進むにつれ自分の考えをはっきりとは言えない子どもが多いと感じている。特に、中学校では、60パーセント以上の教師がそう感じているようだ。

(3) 今後の計画

今後は、このアンケートの結果と一昨年度に実施した子どもたちの調査とを比較検討し、子どもの意識と実態、親や教師から見た子どもたちの内容についての差や、類似点を洗い出し、学校での児童・生徒指導に役立てて頂きたいと考えている。研究のまとめは年度末に各学校に配布される予定ですので、その際には、ぜひ、目を通していただきたい。



新玉小学校教諭
6年生の担任として、元気ががんばる先生。笑顔が素敵でいつもやさしく受け入れてくれる、そういったところが児童からも慕われている先生。



シンプル イズ ベスト

昨年4月、評価・評定に関する研究のため、小学校8名中学校6名のスタッフが研究所に集まった。その前年度の研究で課題が明らかにされたので、それをもとに16年度、17年度の2年間で小中全教科の評価規準を作成することが目的であった。

小中学校それぞれに分かれて、いかなる評価規準を作っていけばよいのか。熱心な話し合いが続けられていった。

「各教科、新しい単元に入る前には、評価規準を確認して単元計画を練る」という基本的な取り組みがなかなか実行できずにいるのが現状であり、夏の教育課程研究会等での話し合いでも「各校で評価規準が用意されているにもかかわらず、なかなか評価規準が使い切れていない」という声を多く耳にしている。そんな現状の中でいかに使える評価基準を作るかが話し合いの大きなテーマとなった。

何度か話し合いを重ねていく中で、私達が出した結論は「シンプル イズ ベスト」だった。評価規準がシンプルであれば大切なことを意識しながら、授業を進めることができるのではないかと、それを意識することは目標を意識しながら授業を進めることになり、指導と評価の一体化につながるのではないかと考えた。そこで、いろいろな意味でより精選されたものを作っていこうという共通理解ができ、評価規準作りを始めていった。

キーワードを指導に生かす（国語科での工夫）

私が担当した国語では、まずいくつかの学校の評価規準を見ながら、いかにシンプルなものを作っていくかということを探ってみた。国語科は他の教科と多少異なり、教材を教えるのではなく、教材で教えるという特徴があるので、四つの内容（「話す・聞く」「書く」「読む」「言語事項」）のどれかに重きを置くことができる。そこで、指導要領の内容をもう一度確認し、それぞれの教材でどの内容を中心に学習を展開していくか整理してみた。それを繰り返すなかで評価規準の精選を行った。

次に、指導要領の中のキーワードを洗い出し、評価規準の中でそのキーワードを太文字にし、はっきりと意識しやすくした。評価規準を意識しながら学習を進めることにより、より一層授業改善も図られると期待している。

各教科とも、いろいろな工夫を取り入れながら、より良い評価規準を作ろうと今努力しているところである。それを手にした教師のひと工夫でより良く使われ、授業に活かされていくことを期待しながら作業を続けているところである。

芦子小学校教諭

誠実な人柄でとても丁寧でやさしい対応が子どもたちからも親しまれている。教務主任としてがんばる先生。



ある教室から

「分かり合い、伝え合おうとする心を育む」

学校教育課指導主事

小学校における英語活動が総合的な学習の時間の中でスタートしてから4年目。全国的には90%以上の学校で様々な取り組みや実践がなされています。この活動を通して期待されることの一つとして、身近な事柄を題材にした英語によるコミュニケーションを体験することで、子どもたちが自らの主体性や積極性を身につけていくことがあげられます。

この日は、担任の先生と英会話講師とのチーム・ティーチングによる、5年生の授業です。インタビューを楽しみながら、お互いの一週間のできごとを知ることをねらいとして授業が始まりました。黒板には、一週間の曜日の名前が日本語とともにさりげなく掲示されています。

まずは、あいさつリレー。子どもたちの名前が書いてあるカードを使って、子どもたちと先生とのあいさつの交換です。‘How are you, ○○?’

‘I’m fine, thank you. How are you, ○○?’

‘I’m ~, thank you.’・・・と、その時、ある子どもが‘I’m hungry!’という反応を返しました。時刻は11時30分過ぎ。そろそろお腹も空く時間。まさに、自分の状況を相手に自然に伝えた場面です。簡単なことのようにですが、日頃の地道な積み重ねが成果として現れるのだということを実感しました。

そして、CDに合わせた曜日の歌。このCDは、少しずつテンポが速くなるように工夫されていて、子どもたちは、体でリズムを感じながら、曜日を英語で口ずさんでいきます。

次に、会話練習。二人の先生によるお手本が示され、そのあとのインタビューゲームにつなげるための練習を続けていきます。先生は英語による的確な指示をしながら、子どもたちとのやりとりの中で、積極的に褒める場面を取り上げます。‘Good!’ ‘Excellent!’

子どもたちは、その度に自信を持ち、次の活動への意欲を掻き立てられていきます。また、語句の練習から英文へと、段階的な指導が工夫されていることも見逃せません。

さて、いよいよ、インタビューゲームです。今までの活動の集大成となるはずだったのですが、始まってまもなく、子どもたちに戸惑いの表情が見られます。「えー、わかんない。」

「ここに書くんじゃないの。」このまま続けるのは・・・。と思った矢先、先生は、子どもたちを集め、方法を再確認します。再開された後の子どもたちは、インタビューの目的を果たすべく、自分から声をかけ、相手とのコミュニケーションを楽しみました。

子どもたちに英語そのものへの興味・関心を持たせ、決して無理することなく、活動にゲーム的な要素を取り入れて、小さな達成感を積み上げていく、という基本的な考え方の上に展開された英語活動。担任の先生と英会話講師との事前の打ち合わせ、授業での明確な役割分担、そして、何より大切な子どもたちとの信頼関係。小・中連携が叫ばれる中、より良い授業作りに向けての多くの糸口を発見できた授業でした。





「本町教室」から「しろやま教室」へ

教育相談指導学級主任

急な階段、薄暗い廊下、和式のトイレ。バリアフリーとはほど遠い建物だったが、なぜかほっとする空間。本町教室とはそんな場所だった。通級希望者にマロニエ教室と本町教室を見学してもらうと、ある人は「新しいマロニエ教室の方が明るくていい。」と答え、またある人は「古い本町教室の方が落ち着いていい。」と言う。本町教室では靴を脱いで生活することも、家庭のような心地よさを醸し出していたのかもしれない。消防署の署員とも顔見知りになって、窓の外を上ってくるはしご車の訓練に手を振る子どもや、緊急出動のサイレンを鳴らしながら出ていく車両を見送る子どももいた。救急訓練や消防署見学のお礼に調理実習で作った（余った？）カレーを山ほど持っていったときにも、笑顔で喜んでもらえた。同じ建物内には観光課城址公園担当の方々や公益事業協会の方々もいて、小田原城や昆虫展の見学に便宜を図ってもらったことも度々あった。「いつも多くの大人に見守られている。」そんな安心感に通級してくる子どもたちは包まれていた。消防署中央分署の移転取り壊し計画に伴い、今まで慣れ親しんだ本町教室を離れるに当たって、施設そのものもさることながら、いつも関わってくださっていた周囲の人々

とのつながりが途絶えてしまうことが心配だった。



4月、青少年相談センターの中の一室に「しろやま教室」が全面的に移転した。当初は、緑に囲まれた静かな環境にかえって戸惑うこともあったようだが、程なく通級生たちには新しい居場所として定着した。調理実習の作品を喜んで食べてくださる相談センターの方もいて、子どもたちの活動を温かく見守ってくださる大人にも恵まれている。窓を開けても本町教室のように海風は入ってこないが、桜の花びらが舞い込んできたり、竹藪の葉音が耳に優しい。そんな新しい環境のもと、5月以降通級生の数が増えてきている。学校に行けず、自宅だけが唯一の居場所といった子どもたちに、心地よく活動する空間を今後も提供することで、在籍校へ復帰する意欲を高めていければと願う。



研究所だより



小田原市教育研究所

特別賞受賞!!

教育研究所がインターネット上に公開している、「小田原 自然観察図鑑」がこのたび、神奈川県総合教育センター教材・教具コンテストにおいて特別賞を受賞しました。県内参加出品数80件のうち、教育長賞1件、所長賞7件、特別賞8件が選ばれ表彰を受けました。「小田原 自然観察図鑑」はインターネット上で活用できるほかに、CDに焼き付けて配布も行っています。(CD 希望の方はカラのCDを持って市役所5階、小田原市教育研究所まで)

☆小田原の子どものための推薦図書

先生方や保護者の皆様に推薦して頂いた本から、小学生用に32冊、中学生用に20冊が選ばれ、各学校へ紹介したところです。

選定は、皆様からご紹介頂いた600冊あまりの本のうち、図書館等の協力を得て、小田原に関係する図書を二百数十冊選び、その後、各小中学校の図書館協議会の担当者からご推薦をいただき決定に至りました。これらの図書は、市立図書館、かもめ図書館に蔵書としてあります。皆様が手にして頂くと同時に、子どもたちへの紹介をお願い致します。

(「しんかんせんのぞみ700だいさくせん」「ぼくはふうせん」はありません)

***推薦図書を紹介します。**

＜小学校下学年対象＞

「赤い鳥小鳥等」「あしがら山のものごたり」「かまぼこを作る工場」「ボクはかまぼこ」「小田原のむかしばなし」「私たちのふるさと昔ばなし」「小田原の祭り」「さあちゃんのぶどう」「足柄平野の雑草」「しんかんせんのぞみ700だいさくせん」「二宮金次郎」「ぼくはふうせん」

＜小学校上学年対象＞

「東海道中膝栗毛」「小田原・足柄の100年」「神奈川の東海道(上)(下)」「地図を楽しもう」「町名見てある記」「小田原さかな物語(小田原ラ

イブラリー)」「神奈川県のみ話と伝説」「小田原・足柄の発展に尽くした人々」「小田原の原風景」「神奈川のみ話」「トコトコ登山電車」「小田原蒲鉾のあゆみ」「村をうるおした命の水」「一枚の古い写真(写真集)」「足柄の野の花」「子供の心をうたった詩人北原白秋」「小田原が生んだ辻村伊助と辻村農園」「十二歳」「二宮金次郎」

＜中学生対象＞

「あの日この日」「末っ子物語」「ゼーロン、淡雪、その他」「虫のいろいろ他」「小田原、箱根、真鶴、湯河原文学散歩」「トロッコ」「春」「真鶴(志賀直哉 短編集)」「四千万歩の男」「箱根の坂」「浮世絵が語る小田原(小田原浮世絵集成)」「撃ちぬかれた本」「焦げたはし箱」「小田原歳時記・昔話(小田原文庫5)」「戦後小田原50年史」「日本最古の水道『小田原早川上水』を考える」「小田原文学散歩」「小田原と北村透谷(小田原ライブラリー10)」「北原白秋その小田原時代」「二宮尊徳」

☆教育研究所の蔵書

研究所には約7,000冊の教育図書や研究紀要があります。中学教育資料や初等教育資料、月刊教育相談などの雑誌も準備しております。先生方であればどなたにでも貸し出ししておりますので、夏期休業中の研修等にお役立て下さい。(研究所のホームページ上から検索が可能です)

小田原教育 第102号

発行日 平成17年7月15日(金)

発行所 小田原市教育研究所

発行者 所長 下澤 禮二

〒250-8555 小田原市荻窪 300

電話 33-1727

研究所ホームページアドレス

<http://www.ed.city.odawara.kanagawa.jp/>

[kyouiku_ken/index.html](http://www.ed.city.odawara.kanagawa.jp/kyouiku_ken/index.html)